別記様式第6

論 文 審 査 の 要 旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士（　文学　） Ph.D.	氏 名 (Candidate Name)	矢吹　文乃
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当		

論　文　題　目 (Title of Dissertation)

寺山修司演劇の再演に関する研究―アダプテーションの視座から―

論文審査担当者 (The Dissertation Committee)

主　　査 (Name of the Committee Chair)	教授	有元　伸子	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	久保田　啓一	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	小林　英起子	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	葉名尻　竜一	（立正大学）

〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)

寺山修司（1935-1983）は、1960～70年代のアングラ演劇を代表する劇作家・演出家で、〈見世物の復権〉の標榜や既存の劇場を離れた〈市街劇〉の実践で知られる。本論文は、寺山の演劇世界を、これまで中心的に論じられてきた初演（寺山主宰の劇団「演劇実験室◉天井桟敷」による公演）だけではなく、寺山没後から現在に至る再演を対象として、アダプテーション（翻案）研究の視座を取り入れながら考察した研究である。戯曲は、再演によって初演時の社会的コンテクストから解放され、再演時の制作者や観客のおかれた社会・文化状況の中で新しい相貌を見せる。本論文では再演の検討によって、上演される時代や社会の価値観を明らかにするとともに、寺山戯曲の読み替えを図った。

論文は、序章、二部八章からなる本論、終章によって構成される。

第Ⅰ部「アダプテーションと倫理」では、アダプテーション理論を導入した考察の前提として、再演が行われる時代・社会について検討し、再演研究の可能性と課題を指摘している。第一章および第二章では、寺山が考案した〈市外劇〉の演劇形態について考察した。寺山の遺した演劇論から市外劇の理念を精査することによって、俳優と観客の二項対立の解体を目指すはずの市外劇の理想が作者・演出家の寺山の存在によって実現不可能となる矛盾を包含することを指摘した。寺山没後の再演ではその矛盾の解決が企図される一方で、市外劇のもつ変革力が現代の文脈では失効してしまうことを述べている。第三章では、寺山の長編小説『あゝ、荒野』のアダプテーション作品と写真家・森山大道との関係を考察し、アダプテーションに付与される〈正統〉性の構造について論じた。第四章では、寺山の映画『草迷宮』のアダプテーションをめぐってＳＮＳ上で展開された〈文化の盗用〉の議論を取り上げて、自文化と他文化の接続と解釈に関わる理論的考察を行った。

第Ⅱ部「再演を問い直す」では、寺山没後の再演を具体的に検討している。第五章および第六章では、寺山の戯曲「身毒丸」と岸田理生によるリライト版の両戯曲と各公演について考察した。〈病い〉や性的な表象に着目して、リライトによる差別的表現の修正と限界について考察し、演出方法による寺山演劇の再評価の可能性について論じた。第七章では、「中国の不思議な役人」の複数の再演を対象として、戯曲に存していたオリエンタリズムの要素が上演によって読み替えられていく様相を論じた。第八章では、寺山の代表的戯曲「毛皮のマリー」について、美輪（丸山）明宏の身体によって生じる〈正統〉化と他の上演主体による再演とを比較することにより、俳優の身体性と戯曲の読み替えの可能性について論じた。

論文全体を通して、アダプテーション理論を援用しながら、寺山修司作品の複数の上演版に見られる反復と変奏の様相を考察して、時代や社会との関係を提示し得ている。ことにジェンダー／セクシュアリティを寺山作品の重要な観点として浮上させた。分析対象作品のさらなる拡大などの課題は残されているものの、寺山没後の再演作品を丁寧に検討することによって戯曲を再解釈し、初演を対象とした従来の寺山戯曲の読解を更新した意義は極めて大きい。さらにアダプテーション理論それ自体の見直しにも言及しており、広く日本近現代文学研究に接続しうる論考として高く評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考　要旨は，1,500字以内とする。
(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)